

6 角 No.
1 直 2
枚 之
（す
み
な
お
ゆ
き
）

M
I
T
S
U
K
O

登場人物	
ミツコ	
ハインリヒ	ミツコの夫。伯爵。
バービツク	ハインリヒの従僕。
父	ミツコの父。
母	ミツコの母。
フリードリヒ	ハインリヒの弟。
アンナ	フリードリヒの妻。
チンドン屋	楽器を鳴らして宣伝を行う請負広告業。(注1)
子供達	ミツコの子供。黙役。(注2)
医者	黙役。
大人達・子供達・売り子衆	
神主・巫女達	
青年達・娘達	
カレルギ―家親族達・客人達	
ウィーソンの市民達	

【第1幕】

正月の日本。神社の境内。

溢れかえる人々が和装・洋装で入り乱れる明治の光景。獅子舞や大道芸人の姿も見られる。

大人達 えらい賑わい。

なんて人々。

これでは、前に進めない。

売り子衆

御餅、焼餅！

子供達 吉凶（きつきょう）、吉凶。

売り子衆

団子がみつつ、よりどりみどり

巫女 おみくじこちら、おみくじこちら。

子供達 小吉、末吉、大吉がでた。

でたでた大吉。吉凶、吉凶。

大人達 えらい賑わい。

なんて人々。

これでは、前に進めない。

青年達・娘達	子供達	娘達	大人達	売り子衆	巫女	娘達	青年達	子供達	大人達	巫女	売り子衆
えらい賑わい。なんて人々。	吉凶、吉凶。引くのは一回。	ああ、離れてしまいそう	団子もみつつ。	うまいよ、うまいよ	おまもりあちら、おふだもあちら。	寄せて返して、波のよう。	ごったがえして、お祭り騒ぎ。	吉凶、吉凶。神頼み。	お参り済ませて、早く一杯。	おみくじこちら、おまもりあちら。	甘酒、甘酒。

少女 少しでも前に、前に進もう。
お参りこちら、お帰りあちら。
売り子衆
お団子みつつ、まいどあり。
青年達 しっかり握って
離れるんじゃないぞ。
子供達 吉凶、吉凶。
凶が出たなら、あっちへ結びに。
売り子衆
お団子みつつ、お買い得だよ。
大人達 あっちもこっちも、えらい賑わい。
ミツコ
（ト お参りを終えて、ハインリヒと連れ立ち）
う。
ほら、向こうでおみくじをひきましたよ。
ハインリヒ
おみくじ？
それは、いったい：
ミツコ 今年一年の運勢を占うの。
吉と出れば、よきこと。
凶と出れば、用心を。

ハイ
ンリ
ヒ

あなたといるのだから

吉と出るに違いない。

（ト 手を取り合っておみくじをひきに行

く）

子供達 吉凶、吉凶。

巫女 おみくじこちら、おまもりあちら。

大人達 あつちも、こつちも、えらい賑わい。

ミツ
コ

（ト おみくじをみて）

「吉。何事も忍耐強く、さすれば自ずと

道は開く。」

ハイ
ンリ
ヒ、あなたのは？

（ト ハイ
ンリ
ヒのおみくじを受け取って）

「凶。病あり。用心せよ。」

ハイ
ンリ
ヒ

大丈夫。気にすることはない。

ミツ
コ
でも…。

ハイ
ンリ
ヒ

占いなら、当たりはずれもあるだろう。

チンドン屋

(ト 舞台ウラから)

チンドン屋、チンドン屋でございー。

子供達

チンドン、チンドン、チンドン、チンドンさん。

チンドン屋さんの声がした。

あっちだ、あっち。

チンドン、チンドン、音鳴る方へ。

(ト 舞台ウラへ行く。)

ハインリヒ

新年早々、商売熱心なことだ。

ミツコ

今が稼ぎ時ではないかしら。

ハインリヒ

騒がしいのはお嫌い？

ハインリヒ

むしろ好きだよ。

ミツコ

私も彼らに混ざりたいぐらいだ。

ミツコ

まあ。

ミツコ

その姿、ぜひ見てみたい。

パービック

その姿、ぜひ見てみたい。

パービック

(ト 駆け寄ってきて)

パービック

(ト 駆け寄ってきて)

パービック

ハインリヒさま！

パービック

こちらに！

ハイ
ンリ
ヒ

どう
した
？

そん
なに
息を
切ら
して
。

バー
ビツ
ク

電報
が！

至急
、帰
られ
たし
、と
。

ハイ
ンリ
ヒ

なぜ
だ？
何が
あつ
た。

バー
ビツ
ク

分か
りま
せぬ
が：

国か
ら手
紙が
届い
たよ
うで
。

とに
かく
一度
、お
戻り
に。

ハイ
ンリ
ヒ

わか
った
。

お前
はミ
ツコ
のそ
ばに
いて
やっ
てく
れ。

ミツ
コ

私も
ご一
緒に
。

ハイ
ンリ
ヒ

たい
した
こと
では
ない
だろ
う。

せつ
かく
の初
詣な
のだ
から
：

そう
だ、
待つ
てい
る間
に、
これ
を結
んで

きて
くれ

（ト
おみ
くじ
を渡
す）

結べば、凶ではなくなるのだろう。
すぐに戻ってくるよ。
バービック、頼んだぞ。

バービック

はい。

(ト ハイソリヒ 舞台ウラへ)

バービック

申し訳ありません。

せっかくお二人で過ごしておられたの

に。

ミツコ

いえ、お国からなら仕方ありません。
それにしても、この人混みのなか、よく

私達をお見つけに。

バービック

それはその…、お二人とも背が高いもの

ですから。

ミツコ

まあ。(ト微笑む)
私、自分の背の高さが嫌いでしたわ。

いつも頭ひとつ飛び出ている、

男より背が高いことも…

バービック

とんでもない。

誇るべきことですよ。

ミツコ ありがとう。

最近は、悪くない気がしてきました。

ハインリヒやあなたのおかげ。

バービック

ハインリヒさまは、ミツコさまに一目惚

れだったそうです。でも、見た目以上

に、もっと素敵な心を持っている、と。

ミツコ 素敵な心をお持ちなのは、あの方のほ

う。

こんな私を選んでくれました。

しがない骨董屋の娘だった私を。

バービック

見た目や地位ではなく、あなたそのもの

を愛していらっしやるのでしよう。

ミツコ そんな。

バービック

これは、口が過ぎました。

チンドン屋

(ト 子供達を引き連れて)

チンドン屋、チンドン屋でございー。

子供達 チンドン、チンドン、チンドン屋さん。

見せて、聞かせて、チンドン、チンド

ン。

チンドン屋

寄ってらっしゃい、観てらっしゃい。正

月風情に相応し、小唄(こばなし)。初

天神へ、行こう行こうとねだる息子、

渋々連れ出し初詣。「ねえ、おとつつあ

ん、今日はあれ買ってこれ買って言わな

くて、良い子でしょう。ほら、良い子で

しょう。」

子供達 それで、それで。

チンドン屋

「そうだな」と答える父に「だから、ご

褒美、お団子買って。」さてさて、この

先どうなるやら。

子供達 続きを早く!

チンドン屋

続きは、あちら。あちらの寄席へ。

子供達 チンドン、チンドン、チンドン、チンドン屋さん。
（ト チンドン屋さんについて行こう。
大人達数人も引き連れて舞台ウラへ）

バービック 日本（にほん）の新年は、なんとも賑やかなものです。
ミツコ 大人も子供もはしゃいで……。せっかくな
ら、坊や達も連れてきたらよかったです
わ。

バービック よろしければ、お連れしますが。
ミツコ 本当ですか？
バービック では、お願いしましょうかしら。
ミツコ はい。
バービック ありがとうございます。
ハイソリヒにも伝えてください。
皆で寄席でも行（ゆ）きましょう、と。
切符は買っておきますわ。
バービック かしこまりました。

(ト 舞台ウラへ。ミツコ、見送る。)

チンドン屋

(ト 舞台ウラから。さらに遠くの方で。)

チンドン屋、チンドン屋でございー。

(ト ミツコ、物思いに耽りながら、祠のほ

うへ。参拝客もまばらになり、やがていなく

なる。)

ミツコ

物心ついた時から

幾度となく訪れたこの場所が、

これまでとは違って見える。

樹も、道も、何もかも。

ここに、変わらず、今もあるのに。

たどり着いた先には

幾度となく聞かされた異国の地が

この私を待っている。

樹も、道も、何もかも。

こことは、違う、そこにあるもの。

染みついたりきたりに
幾度となく引きとめられたこの私が、
私だけが、ここからいなくなる。
樹も、道も、何もかも。
ここに、変わらず、ずっとあるのに。
根をはって生きてきた
この地を離れて、
新しい道を歩いていく。
春になると咲く花が、囀る鳥が、
広げる根のない、この私に
はたして訪れてくれるのでしょうか。
そんな私に
歩ける道などあるのでしょいか。
ああ、もう見ることはないのでしょうか。
この
樹も、道も、何もかも。
怖い、不安なの、悲しいの。
それでも、
ここに、変わらず、今もあるもの。
(ト
胸に手をやって)

深く傷ついた涙から
幾度となく救ってくれたあの方と
これから共に生きていく。
そう、覚悟を決めたのです。
だから、
私は海を越えていく、あの方と共に。
ああ、どうかお守りください、私達の行
く末を。
（ト 祈る。）

（ト 舞台ウラから激怒して現れる）
母 おやめください。後生ですから。
（ト 必死に父を引きとめようとするが、振り
払われる。）
ミツコ 父上！

父 ここで何をしようというのだ。
日本（にほん）を捨てたお前に祈る資格
などない。

ミツコ 捨ててなどおりません。

父 私に愛する方を、ただ愛し続けると誓ったに過ぎないのです。

父 ああ、なんてことをしてくれました。

父 わしの面（つら）に、泥を塗ったな。

許さぬ、許さぬぞ。

ミツコ 父上！話を：

父 毛唐（けとう）の妾の話など、聞くに堪えない。

父 お前がわしの娘だと申すなら、今すぐここで

その首、掻き切るがいい！

（ト ヒ首を叩きつける。）

（ト 騒ぎを聞きつけて、人々が集まる。）

ミツコ 父上は、知らないのです。

父 いいえ、知るのが怖いのだわ。

父 あの方がどんな人で、どんな人生を歩んできたか。そして、私がどんなにあの方を愛しているかを。

父 たわけたことを！

父 わしがどんな思いで、お前を、お家（い）え）を守ってきたか、お前は知るまい。

ミツコ 私は、父上のことも

母上のことも、大事に、大事に思っ

たのに

なぜ、なぜこんなことに…。

母 お前は間違っ

私も、あの人も

お前のことを大事に思う気持ちに変わ

はない。

ただ、幸せになっ

ても、歩む道が違

お前が決めたのだから、

お前の信じる道を歩めばいい。

ミツコ 母上：

母 (ト ヒ首をミツコに持たせて)

これは、お前がお持ちなさい。

死ぬためではなく、生きるために。

誇りを失わず、生きていくために。

ハイ
イン
リヒ

(ト ミツコを見つけて駆け寄る)

ミツコ！

ああ、一体何があった。

ミツコ ハイインリヒ！

母 ああ、どうか娘を頼みます。

きつと、幸せにすると：

ハイインリヒ

お約束します。

母 ミツコ。ミツコ。

どうか、元気で。

（ト 涙をこらえて立ち去る。途中、パービ

ックに連れられてきた子供達とすれ違い、声

をかけようとするが、思いとどまって、目を

そらして舞台ウラへ。）

ハイインリヒ

ああ、ミツコ。一体何が。

ミツコ きつと、大丈夫。

あなたがいるなら、もう何も怖いものは

ありません。

（ト 強く抱きしめる。）

私は、私はあなたさえいれば

生きていける。

（ト パービック、二人の様子を見て、子供

達と共にそっと立ち去る。）

ハイ
ンリ
ヒ

ミツコ、聞いてくれ。

父が亡くなったと手紙があった。

私は、カレルギ―家を継ぐために、今す

ぐに国へ帰らなくてはならない。

ミツコ
そんな…。

ハイ
ンリ
ヒ

どれだけあなたに苦難を強いるか…。

それでも、どうか、共に来てほしい。

ミツコ
ああ、ハイ
ンリヒ。

あなたがいるところなら、どこまでも、

共に。

ハイ
ンリ
ヒ

誰が何と言おうと、生涯をかけて愛する

と誓おう。

ミツコ
あなたの言葉が、どんなに私に力をくれ

るか。

どうか、もう一度強く抱いて。

私が強く生きていけるように。

（ト
抱きしめ合う。）

どうして、どうして私達は異なる国に生

まれついてしまったのかしら。

ハイ
ン
リ
ヒ

異なる国であろうと、同じひとつの世界

に生まれた。

それに、こうして、ここに生まれたから

こそ、私達は出会うことができたのだろ

う。

ミ
ツ
コ

ああ、きつと。

きつとそう。

あなたと出会うために、この地に生ま

れ、この地で育った。

ハイ
ン
リ
ヒ

そして、私と出会い、共に歩むと決めて

くれた。

ミ
ツ
コ

どんなに辛いことがあるうと、

あなたがいれば、乗り越えてゆける。

ハイ
ン
リ
ヒ

あなたと共にいられることが、

私にとってどれだけ幸せか。

ミ
ツ
コ

どこまでも、共に。

あなたと見る世界は、きつと、どこまで

も美しい。

ハイ
ン
リ
ヒ

あなたがいれば、何も怖くはない。
遠く離れた、海の向こうへ行くとして
も。
あなたの言葉が私の支えであるように、
私もあなたの支えとなれるよう。
この胸に溢れる愛を込めて、あなたに眼
差しを。
どこまでも、あなたと、共に。

いつまでも、共に。
あなたと見る未来は、ずっと、いつまで
も愛おしい。
私が必ず、守り通そう。
どんな苦難が、海の向こうで待っていよ
うと。
あなたの眼差しが私の支えであるよう
に、私があなたの支えになろう。
この胸に湧き立つ希望を込めて、あなた
に言葉を。
いつまでも、あなたと共に。

神主・巫女たち

（ト　舞台ウラから二重唱に被さって、遠く
で聴こえる祝詞。）

高天原（たかあまはら）に神留坐（かむ
ずまりま）す

神漏岐（かむろぎ）神漏美（かむろみ）
の命以（みこと）ちて

皇親神伊邪那岐（すめみおやかむいぎな
ぎ）の大神（おおかみ）

筑紫（つくし）の日向（ひむか）の橘
（たちばな）の

小門（おど）の阿波岐原（あわぎはら）
に

禊祓（みそぎはら）ひ（い）給ふ（う）
時に生坐（あれま）せる

祓戸（はらへど）の大神等（おおかみた
ち）

諸々（もろもろ）の禍事罪穢（まがごと
つみけがれ）を

祓（はら）へ（え）給ひ（い）清め給ふ
（う）と申（もう）す事の由（よし）を

天津神（あまつかみ）地津神（くにつか

（第 1 幕 終）

み）
八 百 万 神 等 共 （ や お よ ろ づ の か み た ち と
も ） に 聞 食 （ き こ し め ） せ と
畏 （ か し こ ） み 畏 み も 白 （ ま を ） す

【第2幕・第1場】

カレルギー家の城の大広間。華やかな舞踏会。
中心でミツコとハインリヒがワルツを踊ってい
る。

親族・客人

百合の居姿。

濡れ羽色の髪。

白磁の肌。

黒曜石の瞳。

美しいのか、

ただ、めずらしいだけなのか。

いずれにしろ、

私達とは、違う。

居姿も、髪も、肌も、瞳も。

私達とは、違う。

バービック

お二人とも、素晴らしい踊りでございました。
した。

（ト 二人にグラスを渡す。）

ハインリヒ

ミツコ様の努力には目を見張ります。

本当に。この短い間で、よくここまで。

ミツコ

少しでも、あなたに近づけたらと…。

それに、バービックの丁寧な指導のおかげ。

ハインリヒ

私からも礼を言おう。

ありがとうございます、バービック。

バービック

恐縮でございます。

では、私はお食事のご用意を。

（ト 舞台ウラへ）

（ト 客人たちが入れ替わり立ち代わりハイ
ンリヒに挨拶をする。ハインリヒは、ミツコ
を紹介する。笑顔で受け答える客人たち
も、その場から離れるとひそひそと噂話をす

る。
)

親族・客人

まるで人形のような女。

話もせず、微笑むばかり。

何も知らないのだろう。

私たちが、何を思っているか。

はるか遠く、異国からきた女。

地位も身分もない女。

そんな女、そんな女、

私達の身内だとは、認めない。認めない。

女性たち

なぜ、あんな女を

招き入れたのかしら。

許せない。

あの方の隣に、あの女がいる。

男性たち

言え、なにか女を

追い返す術はないか。

汚（けが）せない。

この家の血筋に、あの女はいらぬ。

親族・客人

ああ、このままでは

この家が、この血筋が

乗っ取られてしまう。

こんなことが

あつてはならない。

断じて、あつてはならない。

私達の血筋に、あんな女が加わるなど。

認めない。認めない。認めない。

あんな女、

私達とは、違う。

フリードリヒ

（ト 客人たちと会話をしているハインリヒ

に、妻のアンナと共に近づき）

よくぞ、お戻りに。

ハインリヒ

フリードリヒ。

紹介しよう、こちらが

フリードリヒ

（ト ハインリヒの言葉をさえぎって）

兄上のいない間に、色々なことがあります

した。

こちら、妻のアンナです。

アンナ お噂はかねがね。(ト会釈する。)

ハインリヒ

(ト驚いて)

いつの間に、結婚を：

フリードリヒ

色々なことがあったのです。兄上が籠の鳥などに、うつつを抜かしている間に。

ハインリヒ

なんてことを！

バービツク

お食事のご用意が整いました。

ハインリヒ

ありがとうございます。

皆様、どうぞこちらへ。

フリードリヒ、話は後だ。

(ト冷たく言い放ち、ミツコを連れて舞台ウ

ラへ。親族や客人もあとへ続く。フリードリヒ

とアンナがその場に残る。)

フリードリヒ

なぜ、私ではない。

なぜ、私が選ばれなかったのだ。

誰よりもこの家を愛し、

誰よりもこの身を捧げてきたのに。

なぜ、あの男が、

この家の中心にいる。

アンナ

お分かりにならないのですか。

あなたに、その覚悟がないからです。

フリードリヒ

一体、何を。

アンナ

この家に相応しくない、

あの二人をのさばらせているのは、

他でもない、あなた。

（ト 壁にかかっている銃をフリードリヒに手

渡す。）

聞きなさい。

この家を真に継ぐ資格があるのは、

あなた。

この血筋をあゝの魔女から守るのは、

あなた。

この銃の引き金を引けるのは、

あなた。
さあ、何をためらうのです。

フリードリヒ

恐ろしい考えが、
私の頭をよぎる。

底知れぬ野心が、

私の胸に押し寄せる。

アンナ

しかるべき決断が、
あなたの手を汚す。

凶り知れぬ運命が

あなたの瞳に映り出す。

その覚悟をするのです。

アンナ・フリードリヒ

ああ、知るがいい、

この家に誰が相応しいかを。

ああ、悔いるがいい、

この家に戻ってきたことを。

共に引こう、

この運命の引き金を。

バービック

（ト 部屋に入ってくる。）

フリードリヒ様、こちらに。

皆様がお待ちです。

お食事のご用意が：

フリードリヒ

兄を呼べ。

バービック

フリードリヒ様、何故（なにゆえ）：

フリードリヒ

口答えするな。

（ト バービックはハインリヒを呼びに部屋

をあとにする。）

フリードリヒ

さあ、来るがいい

己の罪を贖いに。

待ちうけるのは、私ではなく、

この家の血、この家の歴史。

ハインリヒ

（ト ミツコ及びバービックと共に部屋に入

る。
）

フリードリヒ 一体、何の真似だ。

フリードリヒ

ご存じでしょうか。

この世に、銃というものが

何故（なにゆえ）、存在するのかを。

ハインリヒ

何が言いたい。

フリードリヒ

父上は、狩りが好きで

あなたは、狩りが上手かった。

褒められるのは、あなたばかり。

しかし、次は

私が狩って進ぜよう

あなたの横にいる

その魔女を。

バービック

なんてことを！

フリードリヒ

黙っている！バービック！そして、あな

たは

東洋の魔女に魂を売った罪人（つみび

と）。

親族の誰もが、そう思っている。

アンナ そんな方を、当主と認めるわけにはいきま
せん。

ハインリヒ

お前たちが何と言おうと、
この家の長は、私だ。

フリードリヒ

私は常に考えてきました。
どうして、あなたが選ばれ、
この私が選ばれなかったのか。

ハインリヒ

己の心に問いかけるがいい。
それが答えだ。

アンナ 戯言を！

フリードリヒ

選ばれるのは、
いつもあなたで
私は外から眺めているだけ。
誰も私を見てくれなかった。
そんなこと、間違っている、

あゝ、そうだ間違っている
何もかも
全て、あなたのせいだ。
兄上、いや、もはや兄などではない。
罪人め、この家から出ていくがいい。
これは、情けだ。
この引き金を引く前に、
さあ、出ていけ。
（ト 銃口をハインリヒに向ける。）
ハインリヒ
私は出ていきはしない。
お前には、その引き金を引くことも
この家を継ぐこともできはしない。
フリードリヒ
私は本気だ。
ハインリヒ
私も本気だ。
撃てるものなら撃つがいい。
フリードリヒ
ああ！
ああ！
ミツコ
おやめなさい！

実の兄に銃を向けるなど、
人のすることではありません。

フリードリヒ

黙れ！

ミツコ あなたが、ハインリヒを撃つというのな

ら、

（ト ヒ首を取り出し）

私はこの場で血を流しましょう。

あなた方を永遠に呪う血を。

ハインリヒ

よすんだ、ミツコ！

ミツコ この刀は天皇陛下より賜ったもの。

私が死ねば、この国と日本（にほん）の

戦争になる。

戦争の引き金を引く。

その覚悟が、あなたたちにあるのです

か。

フリードリヒ

（ト 引き金を引こうとするが手が震え引く

ことができない。ついに、銃を床に投げ捨て

る。）

なぜだ！

なぜ、そこまでして：

アンナ フリードリヒ！

ミツコ あなたには、一生わからない。

何の覚悟もない、今のあなたには。

ハインリヒ

出て行くのは、お前たちだ。

二度と、この家の門をくぐるな。

（ト フリードリヒはうつむき、部屋をあと

にする。）

アンナ 魔女ともども、滅びるがいい！

（ト 吐き捨て、フリードリヒのあとを追

う。）

ハインリヒ

（ト ミツコに駆け寄り）

ああ、ミツコ！

すまない、こんなことになるうとは。

バービック

ああ、ご無事で何よりです。

ミツコ

（ト 力が抜けて）

母から受け取った、この刀が
こんなところで役に立つなんて：

ハインリヒ

（ト 銃を片付けるバービックに）

バービック、皆（みな）に伝えてくれ。

この先、ミツコを、私の妻を

一人の人間として対等に扱わぬ者には

一人残らず、決闘を申し込むと。

ミツコ そんな！

ハインリヒ

同じ過ちを繰り返さないためにも。これ

は、私のためでもある。

バービック

かしこまりました。

（ト 銃を持って退出。）

ハインリヒ

ああ、ミツコのおかげで

この家を守ることができた。

ありがとう。

（ト 抱きしめる。）

ミツコ あなたのためなら

私は死ぬ覚悟だって：

ハイ
ン
リ
ヒ

何があるうと生きてくれ。

私のために、子供達のために。

ミ
ツ
コ

はい。

(ト ハイ
ン
リ
ヒ
の
手
を
と
つ
て
立
ち
上
が
る
。)

ハイ
ン
リ
ヒ

この世界がひとつであったなら

こんな醜い争いも

起きなかつただろうに：

私の思い描く世界は

夢物語なのだろうか。

ミ
ツ
コ

たとえ夢物語でも：

ひとつ確かなのは

私とあなたが、今こうして

ここにいること。

国も、民族も超えて、

今、私達はここにいるのだから。

きっと、いつか

世界をひとつに結ぶことが

できるはず。

ハイ
ン
リ
ヒ

その言葉を信じよう。

（ト 親族と客人たちの声がする。）

ああ、行かなくては：

向こうで乾杯の続きを。

（ト 近くにあったグラスを持って、ミツコに渡そうとした刹那に落とし、胸を押さえながら、苦しそうに倒れ込む。）

ミツコ （ト 驚き、駆け寄る）

ああ、ハイシリヒ。一体！

バービツク、医者を！早く！

（ト バービツク、駆け込んできて、様子を

見るやいなや急いで医者を呼びに行く。暗

転）

【第2幕・第2場】

数年後。ソファに横たわるハインリヒを子供達とミツコが取り囲む。

ハインリヒ

もっとそばによつて、

見せてくれ、お前達の顔を：

いい顔だ。

口元は私によく似て、

黒い瞳はミツコにそっくりで：

（ト 苦しそうに咳き込む。心配する家族。）

ああ、どうか、お前達に

私の意志を、

私の夢を継いでほしい。

国と国の境は、

地図に引かれた線ではない。

海でも、壁でもない。
肌の色や話す言葉の違いでもない。
その境目は、
私達の眼差しにある。
私達が、相手に投げかける、
その眼差しに。
互いを互いの目で眼差すことで
境目は消え、
私達はひとつになれる。
この世界に新しい繋がりが生まれる。
私は、
見たかったのだ、
私の愛する人々が
その繋がりの中で幸せに微笑むのを。
（ト 再び、苦しそうに咳き込む。）
もう一度、見せてくれ。
お前達の顔を。
ああ、いい目だ。
いい目をしている…

パービック
（ト 医者連れて、部屋に入る。）

お医者さまがお見えに。
（ト 子供達はミツコに促され、名残惜しそ
うに部屋をあとにする。）

ミツコ どうか、どうか夫を

ハインリヒを頼みます。

（ト 言っ て部屋をあとにする。）

ハインリヒ

バービツク、これを：

（ト 封筒を手渡す。）

どうか、これを

お前の手で、届けてくれ。

バービツク

必ずや。

（ト 封筒の宛名を見てから、ハインリヒの
目を見据え、部屋をあとにする。）

（ト 医者は、ハインリヒに薬を飲ませ、脈
をとる。）

ハインリヒ

死ぬのは、怖くない。

だが、ミツコを残して、

子供達を残して、

死ぬわけにはいかないのだ。

私は、まだ生きていたい。

私は、まだ、生きねばならない。

（ト 医者 の腕をつかむ。 医者はハインリヒ
を見つめるが、目をそらす。）

ハイ
ン
リ
ヒ

すまない。

しばらく一人にしてくれ。

（ト 医者、部屋をあとにする。）

ゆるやかに迫ってくる

そのときが

もう、私の目の前に。

なだらかに下っていく

この意識が

問う、私の心残り。

そう：

桜の横で、

エーデルワイスの花が咲くのを

見たかった。

雉の横で、
ツバメの雛が轉るのを
聴きたかった。
私の横で、
ミツコが微笑むのを
守りたかった。
私は
世界がひとつになるのを
見れなかった。
私は
世界がひとつになるのを
聴けなかった。
私は
ミツコの微笑みを
守れなかった：
守れなかった？
あゝ、守らなければ！
それだけには
守らなければ！

私の亡きあと、
残されたミツコは、どうなる。
残された子供達は、どうなる。
残された時間で、
私は一体、何を残すことができる。
（ト
すがる思いでペンと書きかけの手紙を
手にして、最後の言葉を遺そうとする。）
ああ、愛している。
いつまでも、どこまでも。
私は、共に：
手が、鉛のようだ：
だめだ、だめだ、だめだ
私はまだ：ああ、
視界が、黒く、塗りつぶされていく：
（ト
力はなくソファに倒れる）
私は、死ぬのか
もう：
何も見えない：
痛みも、寒さもない：
暗闇。

（ト 子供の一人が部屋に入ってくる。）

雪の降る匂いがする。

雪の溶ける音がする。

私が、雪に溶けていく：

そして

私が、世界に溶けていく：

ああ、そうか

世界は、もとひとつで

私も、この世界の一部なのだ。

（ト 傍へ寄ってきた子供の頬へ手を伸ばす）

私も、世界も、

いつも、いつまでもそこにある

その、

眼差しの中に：

（ト 息絶える。）

（ト 子供は何もわからないまま、ハイソリ

ヒを起こそうと無邪気に揺り動かし続ける。）

（第2幕終）

【第3幕】

ウイーンの街中。喪服のミツコと子供達。通り過ぎる人々。

ミツコ 私の頬をつたう、

反転した世界。

私の瞳を纏う、

滲んだ世界。

私の耳を震わせる、

曇った世界。

そのどこにも、

あなたが、いない。

あなたに、会いたい

その思いで、

私の胸がいたい。

吹き荒（すさ）ぶ風にさえ

あなたの声を探し、
降りしきる雨にさえ
あなたの濡れた睫毛を思う。
そう、最後に見たあなたの顔は、
濡れていた。
あなたの涙で、
私の涙で。
あなたの涙を、
私の涙を、
拭うことすらできなかった
私のこの小さな手に
何ができるといふの。
あなたの棺の列に
加わることを拒んだ
私のこの重い足は
どこに向かえばいいの。
ああ、教えて。
どうして、どうして。
こんなにも早く、あなたは
いなくなってしまった。

親族達
我々が何をなすか。
恐れ、慄くがいい。
お前の血で洗ってやる。
汚された血筋を
私から奪ったものを。
返せ、返せ、返すのだ！

フリードリヒ
我々の家を。我々の財産を。

親族達
返せ、返せ、返すのだ！

ミツコ
あぁ！
見つけたぞ、この盗人！

フリードリヒ
ナ、親族が現れる。（
（ト 凄まじい形相で、フリードリヒとアン
私の頬をつたう。
あなたのいない世界が
私の胸がいたい。
その思いで、
あなたに、会いたい

フリードリヒ

悔い、恥じるがいい。

お前がしてきたことを。

ミツコ

慄くことも、恥じることも私にはない。

あの人が残してくれたものを

ひとつでも手放してしまおうほうが

私にとって一生の悔いになる。

フリードリヒ

お前に残されたものなど

何もありはしない。

お前を守るものも、

お前を救うものも、

もはや、この世にはいないのだから。

親族達

出ていけ、出て行くがよい。

ミツコ

私に、もう帰る場所はない。

私の居場所は、私が決める。

親族達

返せ、返せ、返すのだ！

何もかも、すべて。

フリードリヒ

お前も、お前の子供も

フリードリヒ 何だと！

皇帝陛下のお言葉を！

届けるために参りました。

パウピック どうしてここに！

フリードリヒ

ミツコ パーピック！

（ト 親書を携えたパウピックが現れる。）

親族達 何もありはしない！

フリードリヒ もはや何も、

お前に残されたものは

この地から、この国から。

出ていけ、出て行くがよい。

私達のもの。

親族達 返せ、返せ、返すのだ。

奪われた私の地位と名誉を。

お前のせいで

バービック

(ト 親書を読み上げる)

「ハインリヒ伯爵の死を

心から悼む。

彼の遺志通り、

クーデンホーフ家は

伯爵夫人のミツコが

継承すべし。

何者もこの権利を

揺るがすことはできない。

伯爵夫人への心からの敬愛を

(ト ここに記す。)

フリードリヒ (ト 読み終えて、ミツコに手渡す。)

ああ、何ということ。

これは、一体：

アンナ そんな偽物に、何をとまどって

フリードリヒ

黙れ！

間違いない、本物だ。

ハインリヒが、皇帝陛下に

遺言の手紙を残したのだろう。

バービック

いかにも。

フリードリヒ

ああ、なぜ、

なぜ、それほどのことができる：

私と一体、何がちがう：

(ト ミツコを見つめる。)

ああ：そうか：

ようやく、わかった。

兄にあつて、私にないもの：。

(ト ミツコ、親書を抱きしめてから、フリ

ードリヒを見つめる。)

フリードリヒ

(ト 親族に向けて)

去れ！ 去るがいい！

ここにいないべきでないのは

我々だ。

親族達 一体、何を！

アンナ 気でも狂ったというの？

フリードリヒ

去らぬものには、

今ここで決闘を申し込む。
死にたくなければ去るがいい！
さあ、去れ！
去るのだ！
（ト アンナと親族たち、フリードリヒの凄みに圧倒され、立ち去る。）
私は、ただ認められたいだけだったのだ。
家を継ぐのは、誰のためでもなく、私のため。
私は、私しか見ていなかった。
あなたは、いつも兄を見ていて兄は、あなたを見ていた。
きつと、今も：
（ト 手紙を差し出す。）
フリードリヒ
ミツコ
これは：
私が奪わせた、兄の最後の手紙だ：
何もかも、私が間違っていた。
よいのです。
今あなたの眼差しに

私はあの人と同じ眼差しを感じる：
フリードリヒ
今の私なら、

兄は、私のことを見てくれるだろうか。
ミツコ ええ、きっと：

（ト フリードリヒ、立ち去る。）

（ト それまで周りで様子を見ていた市民が
沸き立つ。）

市民達 息を呑む光景を

目の当たりにした。
日の出ずる国からきた者が
今、こうして日の目を見る
ああ、称えよう。
清く、光の差すこの時を。
ああ、称えよう。
強く、生きていくこの者を。

ミツコ
（ト 手紙の封を開けて。）

「この手紙を読んでいるという事は
私はもうこの世にいないのだろう。」

一日でも長く、いや
一秒でも長く
共に生きていたかった。
それでも
私にとって幸せな人生だった。
どうか顔をあげておくれ。
いま、目の前に広がる世界を
見つめてほしい。
世界は
こんなにも、美しい。
私達の眼差しが
私達を結びつけたように、
私達の眼差しが
世界をひとつにする。
ああ、愛している。
いつまでも、どこまでも。
私は、共に、ひとつ。
「
ああ、ハイシリヒ
愛するハイシリヒ：
あなたは私に

市民達

たくさんのものを
残してくれた。
子供達、あなたとの思い出、
あなたの意志。
そして、あなたの眼差し。
涙に濡れた手紙が
私達の心を打つ。
交じり合う眼差しが
向かう先。
そう、世界は、
こんなにも美しく
愛おしい。

ミツコ

「国と国の境は、
地図に引かれた線ではない。
海でも、壁でもない。
肌の色や話す言葉の違いでもない。
その境目は、
私達の眼差しにある。」
あなたの言葉が

(幕)

市民達

私の胸に生きている。
あなたがこの世界に残してくれたもの。
私がかれからこの世界に残せるもの。
私が子供達に残したいもの。
そう、
このひとつの眼差し。
このひとつの眼差しが
世界をひとつにする時への
ひとつの歴史。
伝えよう、私達の友に。
広げよう、私達が共に
世界に。

注 1 明治時代は「東西屋」や「広目屋」と呼ばれることが多く、チンドン屋という名称はなかったが、歌にした際の響きや歌いやすさ及び、観客への理解度の高さを考慮して、「チンドン屋」を採用した。また、差別的意味合いを持つとの見方もあるが、「チンドン屋」と名乗る場合や「チンドン屋さん」といった表現には差別的意味合いは無いため、問題ないとの考えが一般的。

注 2 日本にいた際、ミツコはハインリヒとの間に息子を二人もうけていたため、第1幕でバビックが連れてくる子供達は男の子2人。第2幕第2場では、子供達は全員で7人となる。